

第一部門 〈哲学・思想に関する論文〉 奨励賞論文

大城立裕の文学と思想への一視点

—— 沖縄を問うための問題意識

柳井貴士

やな い たか し
柳 井 貴 士 さん

【略歴】

年 齢 45歳
住 所 沖縄県島尻郡南風原町在住
略 歴 栃木県栃木市出身
法政大学文学部卒業、早稲田大学大学院文学研究科修士課程修了、同博士課程単位取得満期退学（博士（文学））。法政大学沖縄文化研究所国内研究員、国際交流基金客員研究員、中国・蘭州大学外国語学院講師などを経て、現在、愛知淑徳大学創造表現学部講師を務める。

【応募動機及びコメント】

私の沖縄の文学への関心は、学部時代、相次いで沖縄出身の作家が芥川賞を受賞したことに端を発します。又吉栄喜の「豚の報い」は基層的な文化と新たな伝統の創出の葛藤を、目取真俊の「水滴」は沖縄戦をめぐる記憶と痛みをえがいていました。大学内に沖縄文化研究所もあり、沖縄への興味、関心はこの時代に深まりました。

沖縄で最初に芥川賞を受賞した大城立裕は、戦後から現在まで文学、評論活動を通して沖縄の「現実」と向き合い、沖縄をめぐる日本の有り方に対して、強固な批評眼をもって言説を形成してきました。その文学活動の初期に目を配り、作品における大城の思想性について論じることができれば、との思いから本論を構想しました。

今回は、試論としての初期大城論を評価していただき感謝の念に堪えません。これを励みとして、大城立裕の文学作品の考察の幅を広げ、沖縄文学研究へ貢献できるよう努めたいと思います。またこの場をかりて、これまでご指導くださった先生方、支えてくれた家族、友人に感謝の思いを伝えさせていただきます。ありがとうございます。

〔梗概〕

大城立裕は、戦前に生まれ、戦時中は上海にある東亜同文書院大学で学んだ。戦後に帰郷し、沖縄を代表する小説家、思想家となる。大城の初期の作品群には沖縄を積極的に代表する姿勢とは異なる、私小説的なミニマムな世界が展開されていた（「老翁記」など）。一方、一九五〇年代に始まる米軍統治の強権力発動の場において、沖縄の政治性と文学との衝突を目の当たりにしていく（『琉大文学』との論争）。この時期に書かれたエッセイを手掛かりにすることで、大城が沖縄の自立性を問い、そのうえで、沖縄的なものを思考していった。その延長上に、「カクテル・パーティー」があった。本作では、一義的な被害／加害の関係を解体し、沖縄の現状への疑義を呈した。つまり、当事者性や加害性に目を向けることで、加害／被害の両義的な痛みを伴うことに向き合ったのであった。

また「神島」では、沖縄にある架空の離島における複層的な関係性をとらえ、戦争の痛みと、〈日常〉の回復という問題を対立させた。戦争の痛みは忘却しえないものであるが、島民（集団自決に連なる人々・当事者）は〈日常〉を回復して未来に生きなければならない。島民がいかなるポジションに位置するかを問うことで、複層化した生と死の意味を対立させたのであった。

沖縄を問うことは一義的な問題ではない。大城は、対の概念を用いながら、出来事（事件）に見られる多層性に目を向け、当事者性、痛みを共有することを厭わない。なぜならその地点からしか主体性は立ち上がらないからだ。この問題は、現在の沖縄へも連なる問いとなる。辺野古に基地がなぜ建設されねばならないのか、なぜ多くの米軍施設が沖縄に集中するのか。

本論では大城立裕の戦後からの長い長い文学活動の初期から六〇年代

の作品と思想の関連を指摘したい。

一、大城立裕とは何ものか

大城立裕とは何ものか。「カクテル・パーティー」⁽¹⁾による沖繩初の芥川賞受賞（一九六七年）が示すように、沖繩出身の小説家であることは間違いない。しかし大城の活躍はそれだけに留まらない。大野隆之が指摘したように、小説家であり、戯曲家、詩人でもある。また戦後の沖繩の言論をリードした評論家でもあり、思想家でもある⁽²⁾。一九二五年に沖繩県の中城村に生まれた大城は、まさに戦後の沖繩の言論界の中心な存在なのだといえる。

大城立裕の長い文学活動においてまず注目されるのは、やはり「カクテル・パーティー」による芥川賞受賞であろう。一九六六年発刊の『新沖繩文学』第一号において「沖繩は文学不毛の地か」⁽³⁾と問われた翌年の芥川賞受賞は、大きな「事件」であった。その当時の様子を大城は、「沖繩では受賞の決まった翌日、さっそく祝贺カクテル・パーティーがおこなわれ」、「すぐくにぎわったパーティーで、ある先輩が私に握手を求めていった。「ぼくらの明治以来の夢をかなえてくれた」。私は受賞いはじめて涙ぐんだ」と述べている。だが、ここで大城は、沖繩における熱気のようなものを伝えると同時に、「作品が発表されると新聞が大きく報道したので、米軍司令部や米国民政府では、かなりの騒ぎになったらしいが、罰が及ばなかったのは、内容が難しくて翻訳・報告に困ったからだ」という説と、日本復帰路線が敷かれはじめていたから、という説がある」と付け加えている。一九七二年五月に、本土へ復帰することとなる沖繩は、この時点でいまだ米軍施政権下にあったのである。

文学にとどまらず社会的な意味を持つ芥川賞が与えられたことは、大城自身が指摘したように、「日本復帰」という政治的プログラムに呼応したような印象を与える。だが、日本復帰が「ハレ」の行事としてだけ、当時の沖繩において認識されていたわけではない。問題は復帰そのもの

ではなく、復帰「後」における沖繩「県」の在り方であった。大城は、「憲法」に守られない沖繩の、米軍施政権下の環境に異議をとなえ、「憲法」がなければ、民主主義と共産主義の対立や冷戦構造といった政治的課題さえも沖繩においては意味をなさない、とする。つまり権力の支配構造において常に下位化される沖繩が現前化しつづけるだけだと認識するのである。

大城立裕は芥川賞受賞の前に多くのエッセイを書いている。沖繩の現状を、沖繩に住む人々（とくに教育者）に対して批判的に訴えてきた⁽⁴⁾。また受賞を機に、本土に対して言説を展開する機会を得て、まず『現地からの報告』⁽⁵⁾として、社会システムや政治環境を、作家である一方、公務員という立場から書き綴ってきた。そこでは、米軍支配構造への批判とともに、沖繩に住む人々の闘争への無自覚さ——自分が立つ沖繩の文化を希薄化し、日本という幻影に追従する姿への批判があった。

大城にとっては、当時の沖繩が置かれた「構造」そのものの理解が何よりも重視され、局地的な「正論」は、「憲法」不在の沖繩にとって大きな意味をなすものには思えなかったのである。

沖繩県立図書館に大城自身が寄贈して成立した「大城文庫」には、戦後の沖繩のニュースの走り書きメモに始まり、自らの作品へ影響するような事件の新聞切り抜き、作品メモが数多く所蔵されている。例えば、後述する一九六八年発表の「神島」⁽⁶⁾に対しては、様々な角度から作品の再検討がなされ、後に劇化されたことも手伝い、あるいは単行本化にあたり加筆修正されたこともあり、登場人物の位置づけが丁寧に、正確に準備されている。とりわけ、このような作業は一九六〇年代に目立つように思えるが、大城立裕の作家としての道程は、すでにこの段階で二〇年に達しているのであった。それは一九四九年の「老翁記」から数えることであり、この作品で展開された「私小説的」（と自身も言及する）内容は、大きく変容しているわけである⁽⁶⁾。だからといって、大

城立裕の出発点を、「老翁記」に早急に見出すことはここでは避けたい。それはなぜなのか。

大城の出発点については、おそらく一人の作家の原点というに止まらず、戦後の「沖縄」という多層的な環境そのものと深く関わるものだと見立てることができる。ひとつには、大城の古い雑稿をみるに、「沖縄」というコロニアルな環境への自覚が、最初期から問題化されていないようにみえるからである。大城が「沖縄」というものを「背負う」ことがどのような流れで行われていたかを見ることは、沖縄の多層性の一端を読み解くカギになると思われる。ふたつ目には、その出発点を確認できたとして、そこからどのような「沖縄」への自覚が生じていくのかを考えることで、政治的課題と必ずしも一致しない、コロニアルな状況が見えてくるように思えるのである。

そこで本論では大城立裕の戦後からの長い長い文学活動の初期から六〇年代の作品と思想の関連を考察したい。

二、〈エトランゼ〉としての帰還

終戦の年に二十歳であった大城は「上海にあった東亜同文書院大学という国策学校に行っていたが学業途中で兵隊にとられ、除隊になってくると学校も閉鎖になった。青春の志は、かくてもろくもペアであった」と述べる（「私の文学風景」）。上海に渡る大城は、「この学校をえらんだのは、たんに学資が助かるというだけの理由からにすぎない」（「年譜（試案）」）とするのだが、ノロ殿内という文化的伝統を継承する中城の家に生まれた大城が——もちろん女性性を担保とするノロを自身が継承するわけではないにしても、沖縄を離れるということは大きな決断だったように思える。

大城立裕はこの東亜同文書院大学の「第四期生（大学第五期）」とし

て「昭和十八年四月一日予科入学昭和十九年十月一日学部入学」（『東亜同文書院大学史』）している。また上海での体験を軸にして『朝、上海に立ちつくす』（一九八三年）を執筆している。一方で、その実体験の詳細を、エッセイなどに書き記す機会は多くはない。例えば、一九五〇年代にいくつかのエッセイを記し、また上海にあった内山書店（内山完造）の思い出を述べ（「上海の本屋」）、あるいは上海の風景や記憶、インフレーションのことなどを断片的に語り、「一九四三年に入学してから、一年のあいだに物価が五千倍もはねあがった。（中略）親へ「カネオクルナ」と電報を打ち、日本人生徒の家庭教師をして「凌いだ」と記す程度である。（「私の上海」）。また、ここに「日本人生徒の家庭教師」をしたとあるが、その詳細は省かれている。

前述の「大城文庫」には、「月の夜がたり」という草稿が保管されている。一九四七年に記したと思われる本作は、「上海物語」として「義豊里の人々」との関係を書くためのものであり（表紙に明記）、上海での家庭教師経験や、同郷の先輩（金城）の戦死、家庭教師先での心温まるエピソード、当時の流行についてなどが記されていた。ここには上海での学生として、迫りくる戦火への反応は記されているが、沖縄という出自についての掘下げは行なわれていない。『朝、上海に立ちつくす』が、東京（本土）／沖縄／朝鮮／台湾を代表する登場人物による民族的な葛藤（の発見）を主題化しているのに対して、戦後、熊本を經由して沖縄に戻った大城がその時期に記した「月の夜がたり」では人的な交流における素朴なまでの暖かさの表明が、作品の中心をしめている。民族的な問題の提起はなされず、したがって上海での体験を相対化しつつ、沖縄と日本・東京、植民地下の朝鮮や台湾における民族の問題を小説の主題にする『朝、上海に立ちつくす』までには、長い年月をかけたことになる。

大城は対象を緻密にとらえ、掘下げることで作品を構成する。「戦争と文化」三部作と呼ばれる『日の果てから』（一九三年）、『かがやける荒野』

(九五年)、『恋を売る家』(九八年)をはじめ、多くの作品において、近世、近代前期の歴史、シヤーマニズム、米軍の占領などを主題化しているのだが、ここで注目したいのは、沖繩への大城の帰還という問題である。

前述のように大城は戦時下を上海で過ごした。一九四四年一〇月一〇日の那覇の空襲から顕著になる、沖繩における戦争の足音を直接的には聞いていない。その後の米軍の上陸、第三二軍司令部があった首里城の陥落、南部への移動と犠牲者の増加、司令官の自害と局地戦の継続。さらには中国で「日本鬼子」といわれた(日本軍人)による野蛮な行為の数々が、内的な恐怖を喚起し、日本兵に逆らうことにより受けるかもしれない蛮行への恐れが、沖繩県民を苦しめたことも多くの手記に残されている。大城は、沖繩戦を伝聞や文字媒体から学び、内面化していったのだといえよう。

終戦後、中国で軍隊の通訳業務を行いながら、帰国の機会をうかがった大城は、まず姉の住む熊本へ帰還した。その後、一九四七年に沖繩の土を踏むことになる。

大城の戯曲作品に「望郷」がある(一九四九年、コザ地区教育連合会脚本募集・当選)。花田俊典が論述したように、本作は熊本の闇市を根城にする青年たちを中心に描いている⁷⁾。「大城文庫」に収められた冊子の表紙には、一九四八年から教鞭をとった野嵩高等学校の校名が記され、大城自身の年譜によれば、一九四七年「明雲」をもって沖繩民政府文化部芸術課脚本懸賞に当選の後、同年に執筆した、とある。発表の順番は前後するが、一九四八年には沖繩教育連合会懸賞募集で当選した「或日の蔡温」があり、ここまで大城は戯曲を三作品、世に問うていることになる(「明雲」原稿は行方不明)。この戯曲は小さな屋台を営む「沖繩人」である清子が、浩吉、三郎と偶然再会することではじまる。そこに「内地人」孤児の啓太郎や、「朝鮮人」を交えることで故郷の意味が問われる

ことになる。「まったく新劇風」(『光源を求めて』)だとする「望郷」には興味深い台詞がある。「たゞ俺達だけは、故郷がないばかりに、あつちをふらつき、こつちにさまよい、いつの日に落ち着くことはあるのやら」と浩吉は思いながら、次のように言うのである(8)。

だけど清ちゃん、俺達はまだ本当に希望を失ったわけではないんだ。故郷へ帰るまではな。所があれを見てごらん(下手にねている孤児を指さす)／あれこそ夢も希望もない。可哀想に小学校を出るかわからない中にひとりぼつちだ。あの子供達に友情があるかどうかかわからない。しかし生まれ故郷にいながらあんな生活をしなければならいなんて故郷の値打があるだろうか。

ひがみさ。沖繩人だつて、朝鮮人だつて、内地人だつてひがんでいるんだ。みんな希望を失った連中のひがみなんだ。異民族との戦争がすんだと思つたら、今度は同じ民族同志の喧嘩だ。之がいつまで続くか分らない。俺も復員して直きは、やけくそになつて面白半分喧嘩もしたが近頃はだん／＼自分ながら浅ましくなつて来たよ。

ここで問われる「ひがみ」は、またそれぞれの位相が抱え込む「空白」と呼ぶ。大日本帝国という版図と内在される植民地との関係が、戦後の転換点において無防備なまでに投げ出される場を、大城は創造していくのである。その「空白」を埋めるのが「故郷」であり、ここでは「沖繩」が「望」まれるのである。独立した朝鮮半島へ帰京することもままならない「朝鮮人」、親族や家財を失い明日をも知れない不安とともに生きねばならない「内地人」。沖繩も地上戦で焼けてしまったけれど、帰京するまでは希望を捨てずにいられる「沖繩人」。ここでは、上海、熊本、沖繩へと移動した大城自身の思いが託されているように思える。

一方で、エッセイ『光源を求めて』では、この頃の熊本体験を引きながら「しかし、沖縄人のばあい、それだけでもなく、アメリカ占領下の日本において、自分たちの郷土・沖縄は、アメリカの直接統治下にあつて、日本と対等にある、あるいは日本よりエライ、という奇妙な錯覚がなかったらうか」と疑問を挙げている。日本／沖縄という関係は、同化や自立の問題を明治期以来、長く内在してきた⁹⁾。「沖縄人」が抱えるコンプレックスに由来した「奇妙な感覚」（花田俊典は「優越感」と読み換える）は、卑屈さの裏返しでしかなく、真の意味での戦後沖縄の存在論の土台にはならない。大城は上海から、熊本から、沖縄を「望郷」しながら、新しく動き出す沖縄の自律性を、戦時下において外部を知った〈エトランゼ〉として希求することになったのである。

三、『琉大文学』同人との論争——沖縄における文学の行方

戦前に大学の設置がなされなかった沖縄で、米国民政府布令第三〇号に基づいて開学されたのが琉球大学であった。琉大では権力の意に沿わない言論活動も行われ、一九五三年四月に「琉球大学学生四名が大学当局により六カ月間の謹慎処分」に付され、更に越えて五月、これら四学生は大学を追放され学籍を奪われた事件¹⁰⁾、所謂「第一次琉大事件」が発生していた。これは政経クラブの機関誌『自由』発刊や「原爆展」開催、また一九五二年六月の琉大生による総決起大会への軍情報部の干渉と政経クラブによる質問状への制裁処置だとされる。ここには学問と政治が交錯する場としての側面があった。その琉大において一九五三年七月、『琉大文学』が発刊したのが『琉大文学』である。

ここからは、新川明、川満信一、池澤聡、喜舎場順など、「今日に至る現代沖縄の文化や思想を語る上で欠かせない重要な人物が輩出」（我部聖『琉大文学』解説）¹¹⁾されている。『琉大文学』での活動を通して、新川

や川満が志したのは、沖縄が抱える〈植民地〉的状况への抵抗の文学であった。新川（新井暁名義）は船越義彰を例にとり、文学においては主体性の確立が重要であるが、現状は自我放棄状態にあり、私小説的であるという批判を展開する。ここでの作品における私小説性とは、逃避的な態度を指すのであり、現実には相反する態度が否定されるのである。新川は沖縄の〈植民地〉状態、検閲体制が続く限り文学の可能性は狭められ、一定限界内に押しとどめられると指摘し、さらに「今日の社会的諸機構によつて律せられる必然的な明確な原因」を詩人は意識すべきだと述べるのである。それは、一九五〇年代に進行する、米軍による強権的な土地接収問題などの政治的圧力を視野に入れた、反権力的な思考の展開であった。

『琉大文学』では米国占領者への批判を含んだ新川の『有色人種』抄¹²⁾や、「横暴と制圧をたくらむ異邦人」の「真実を語り告げること」を、おそれないと書いた濱丘獨『息子の告訴状』などを掲載した一一号（一九五六・三）が、事前検閲を受けなかったという理由により発刊停止となった。ここにおいて〈外部〉圧力が明瞭に働き、表現の自由を篡奪する状況が可視化される。同人が抵抗すべきは、これら権力機構に象徴される〈植民地〉的在り様であるが、大城は復刊した一二号掲載のエッセイで、同人の政治への発言が「他律的な操作」だと批判する。「休刊をよぎなくされた政治的契機をのみ考えて従来多かつた刺戟的なテーマや表現をさけるだけでなく、「個の歩みを見つめて無自覚的に他のイズム」に転換しない作品の登場を求めている。大城は小説が社会性だけに依存した宣伝になるのではなく、個人を契機とする自立したものであることを訴えるのである。

大城自身は一九五〇年代を模索の時期だったとするが、また戦争と米軍支配の現状の〈複雑〉さを見定め、「他者との関わり」をふまえて、「他者を意識」した時期でもあったとする（動く時間と動かない時間）。大

城は沖縄戦を経験せずに、戦後に沖縄に帰還し、「沖縄へのこだわりや、意識の屈折を対象化することができなかった」と評価された（岡本恵徳「大城立裕の文学と思想」）。つまり戦後沖縄という環境において、私小説的なものから、「沖縄へのこだわり」を示すために必要とされたものは、不在だった沖縄戦における「他者」の体験と、そこから「有機的」に構築される物語への志向であった。

『琉大文学』同人は、大城の作品を「社会主義リアリズム」に欠けた「閉鎖性と狭隘性の文学」として規定した。一方で、大城が一九五〇年代を通して、六〇年代に模索したのは「閉鎖性と狭隘性の文学」と断じきれない作品創作であった。大城は『琉大文学』との対立から方法論へと意識を向けていた。〈米軍／沖縄〉という「リアリズム」に還元されず、さらに私小説的なものから脱却した作品創造に向かっていくのである。

四、「主体性」の問題——沖縄を他者化する視線「カクテル・パーティー」

第五七回芥川賞を受賞した「カクテル・パーティー」⁽¹⁰⁾は文学的価値もさることながら、沖縄を抱える政治的な現状を指し示した作品だといえる。本作は前章と後章に分かれ、前章では「私」という一人称、後章ではその「私」が「お前」と名指しされる二人称の形式をとっている。これは、日本語という制度を通して、臨場感を伴いながら、読者に沖縄という本土復帰前の「外地」で起こった出来事をめぐる「当事者性」の一端を担わせる形式だといえよう。「内地にはない深刻な状況が取扱われている、切迫した小説的興味を生み出している」（大岡昇平による芥川賞選評）という評価は、文学作品が社会との接点において大きな意味を持ちうることをあらためて示唆している。

「カクテル・パーティー」には、米国（ミラー）／日本（小川）／沖縄（私）、更には中国（孫）を象徴する人物が登場する。「多言語的男性

人物」の関りによる「変転する二項関係の権力配分」⁽¹¹⁾の展開が、国際親善の「仮面の論理」を剥がしていくのである。前章では、中国語研究グループに属する役所勤めの「私」、本土新聞記者の小川、中国人弁護士の子孫が、米軍基地内のミラー宅で行われるパーティーに参加する。沖縄の文化、戦後史、復帰の問題が語られる中で、会の参加者・モーガンの息子の行方不明の報が飛び込む。これは、沖縄人メイドによる「善意」による行動の結果であった。後章では、帰宅した「私」に関わる事件が中心となる（「お前」という一人称を用いて展開するが、本論では「私」と呼ぶ）。「私」の娘が、家を間借りしている軍属ロバート・ハリスによりレイプされ、娘はハリスを崖から突き落として怪我を負わせてしまった。この事件の扱いについて、「私」はミラーや孫に相談するが、ここに戦時下における重層的な被害／加害関係が現前化され、「私」はハリス告訴を躊躇する。一方で、先のモーガンが善意の沖縄人メイドを告訴したことを知り、国際親善の仮面の欺瞞を抱えながら、ハリスの告訴に踏み切るのであった。本作には、多くの先行研究があり⁽¹²⁾、「私」の告訴という行動の独断性、娘の不在化、ジェンダー問題の欠落についての指摘も行われている⁽¹³⁾。

ここで注目したいのは本作に対する大城の思想である。一九五〇年代、六〇年代における大城立裕の思想に「主体性」を問うたのは鹿野政直だった。鹿野は「主体回復の模索の時期の、文学作品における証し」として「カクテル・パーティー」をとらえていく。大城は沖縄では「高等弁務官の権限は大きい。無限だというひともある。なにしろ「自由諸国を守るために沖縄を保有する」と歴代の大統領がたびたび言明した、その沖縄の基本法がそのためにあるのも無理はない」⁽¹⁴⁾と述べる。「沖縄では日本国憲法は適用されず、そのかわりをつとめて法体系の基本に立つものは「琉球列島の管理に関する行政命令」「大統領行政命令」といつている」⁽¹⁵⁾が基本となり、サンフランシスコ平和条約が象徴する独立からは

乖離している。沖繩が従属的な環境に配置され、太平洋の要石として、対共産主義の枠組みの中で重要視される中であつては、沖繩を利用するため露骨なまでに、「高等弁務官」を頂点とする権力が発動していくことは、先の琉大事件からもうかがえる。米軍属との裁判となれば、不平等性が明らかにになり、多くの場合、被害者は沈黙させられる⁽¹⁵⁾。これは沖繩に生きる個人の問題でもあり、また沖繩県の問題でもあつた。本土復帰が希求された一九五〇年代、復帰プログラムが進行する六〇年代を通して、大城は本土復帰への従属的姿勢に疑義を抱き続けていく。それは頭だけ挿げ替えて、結果的に日本に従属させられる環境を危惧したからであり、沖繩が「沖繩である」という「主体性」(鹿野政直)を持ち独自のな位相が共有されないままに復帰することへの問題提起でもあつた。

沖繩の歴史的な展開に外圧性を認めながら、素朴な「同化」論への注意を促すこと。それは沖繩学の父・伊波普猷が「琉球処分」を、薩摩藩支配(一六〇九年)からの「解放」と捉えたのに対して、薩摩藩侵略、琉球の併合(一八七九年)、敗戦から米国施政権下への移行(一九四五―五二年)、本土復帰(一九七二年)を「琉球処分」の系列に配置する姿勢からもうかがえるだろう。大城は、自律的、主体的である沖繩を模索すること無しに、七二年に設定された本土復帰を歓迎しない姿勢をとる。眼前にある政治プログラムに抵抗すること、文学作品の有り様に関して、大城自身は簡単に決着をつけてはいないようだ。大城は「私小説的な発想の姿勢、そこからくる小説作法の弱さを勉強して補うようにしむけてくれたのは、『琉大文学』の新川明君たちであつた」⁽¹⁶⁾として、初期の私小説的創作姿勢からの方向転換を促した論争を価値づけている。ここで大城がさらに加えて述べる「沖繩の素性、沖繩なるものへの関心」は、『新沖繩文学』創刊から四号にかけて掲載された、「山がひらける頃」(戯曲)、「亀甲墓」、「逆光のなかで」、「カクテル・パーティー」執筆の原動力になつたと思われる。「沖繩の素性」「沖繩なるもの」は、一九六

〇年代の作品群を見るに、沖繩戦(「亀甲墓」など)や占領構造(「逆光のなかで」「カクテル・パーティー」など)の主題化であり、また沖繩の基層文化(「亀甲墓」)への目配りを促している。

つまり大城は、その初期において私小説的な作品(戯曲や小説)を創作しながら、沖繩の歴史性、民族性、文化性への知見を獲得しつつ、一方で政治性のみ特化する文学や思想を後景化し、憲法や文化の問題から沖繩をとらえていくのである。したがって「カクテル・パーティー」は、「沖繩なるもの」が抱え込む、いま・こことしての問題を提示しつつ、「ユニバーサル」⁽¹⁷⁾な作品として捉えられていく。大城は、この均衡の上で、「沖繩の素性」や「沖繩なるもの」を追求していくのであつた。

では「カクテル・パーティー」における「沖繩の素性」とは何であるのか。大城は、本作に米/日/沖繩という三項に、中国を加えている。ここには上海への留学体験で見聞した日本兵の素行が反映されているかもしれない。弁護士の子孫は、「私」が娘のレイプ事件を告訴する姿勢を示したとき、自らの来歴を語っている。それは戦時中に、日本兵に犯された妻の話だつた。終戦間際、北京の中学校に通っていた小川と、大陸で軍事訓練を受けていた「私」は、孫の告白を聞いたとき、中国における日本兵(人)と中国人との関係を、自らに引き受けなければならぬ存在として焦点化される。

「あなたはそれでは」小川がいった。「あなたの奥さんが日本兵からそのような目にあつたから、こんどの(「私」の娘が被つた――引用者)事件もあきらめるとおっしゃるのですか」／「両方の責任を差引き感情で帳消しにするということは、よくないことなのですよ」(中略)「なるほどあなたは、日本対中国の関係をアメリカ対沖繩の関係にあてはめて、ひとつの真実を示された。そして、そのときあなたは、日本が中国にたいしておこなつた行為を批判している

ような態度を示された。しかし、私からみれば、あなたの理解は非常に抽象的だ。あなたが具体的にその関係を理解するには、あなた自身の中国における生活、あのときの中国人と日本人との接触のしかたを見聞した事例を思いださなければならぬと思うのです（後略）

ここで問われるのは「当事者性」という問題である。自分個人が遭遇した事件——戦時下における日本と中国の民衆の上辺だけの仮面の親善行為、それを突き破るような中国民衆への暴力的行為に関して、自らは関与していなくとも、「無関心をよそおった」態度で臨んだことが、小川と「私」、孫との間で問われていく。「私」は「部下の兵隊のひとり」が中国人の物売りからひったくりのようなことをやったとき、義憤のようなものできつい折檻をしたものの、あとで中隊長からそれを批判されて一言も反論しなかった」経験を思い出す。ここでは、自らが引き受けねばならない「当事者性」は言葉を失い沈黙される。「私」は、その沈黙の主体となりながら、自らの加害者性と向き合わなければならない。沖繩がアメリカと対置されるとき、被害／加害の関係が公権力を通して現前化するのが沖繩であった。だが日本国民として、日本兵として、体験した中国への加害者性と向き合わなければならないとき、複層的な位相にそれぞれが主体が位置付けられることになる。民族としての被害／加害の関係は絶対的なものではなく、しかし「私」個人としては、娘が被った傷には向き合いたい。本作は、アメリカ／沖繩を中心とした親善（仮面の論理）において、男／女、加害／被害という関係を扱いつつ、日本、中国を配置することで、絶対的な被害者性なるものを否定しつつ、「沖繩の素性」を問うたことになる。つまりここでは、沖繩の「主体性」を見出すために、複層的位相が明らかにされ、その中で、被害者であり加害者でもある「沖繩」＝「私」が立ち上がる様が描かれているのであった。

五、「神島」における問題意識

大城立裕の「神島」は『新潮』一九六八年五月号に掲載された。芥川賞受賞後第一作として発表された「シヨリーの脱出」に続く、本土での雑誌掲載第二作目にあたる。「神島」は、「集団自決」が行われた渡嘉敷島をモデルとして、島民の現在を島外人の目を通して描いている。

「神島」は一九六八年の初出後、一九七四年に日本放送出版協会より単行本化された。その「発表誌一覽」には「神島」はここに収めるにあたって大幅に改めた」と記されている。この改稿点として重要なのは、「桃原」と「村井伍長」（元日本兵）が新たに登場する点である。神島に駐屯した日本兵への複雑な思いを示す島民に対して、「桃原」は「村井伍長」への親愛の情を示している。「わたしは村井伍長さんには、どれだけ恩があるから。この島のひとたちはね、集団自決がどうかいって、ヤマト人の悪口ばかり言うがよ。ヤマト人にもいい人もいるんだから」と語る。この人物の登場は、「神島」内部での対立をより複雑なものにしていく⁽¹⁸⁾。

大城立裕は、沖繩を考える際に、「複眼」という視点の持ち方を重視している。「渡嘉敷島は、すぎた戦争で集団自決のおこなわれた島だ。そこにいま、ミサイル基地が安住している。島のひとたちはそれを疑わない」⁽¹⁹⁾と述べ、それは例えば「カクテル・パーティー」における「被害者であり加害者である」という側面への「問いかけ」として現われている。本作「神島」でも、この「複眼」の視点が重要となる。

仲程昌徳は「……」「集団自決」を生き残った普天間全秀、全秀の妹で、日本兵に連行されていったまま行方不明になった夫の遺骨を探し続けている島の祝女・浜川ヤエ、その他農、漁業従事者、基地労働者、役場職員、教員といった島の住人たちと、「島の観光映画の製作」のために島にやってきた与那城昭男、事故死した浜川ヤエの息子の遺骨を持ってきた、

彼と同棲していた木村芳枝、島で死んだ父親の慰霊祭に参加するためにやってきた宮口朋子、島の民俗を研究するために滞在している大垣清彦、そして二十三年ぶりに島を訪れた田港真行といった外来者たちとの間で繰り広げられる島をめぐる問題を全面的に切開しようとした」(20) 作品だと指摘する。

「神島」の「三章」では、いまは島外に居住する、島出身の視点人物田港真行の、慰霊祭出席のための帰島歓迎会が中心に描かれている。島民は島の「現実」に生きること、〈日常〉を維持したい。田港が拘る「戦争のときの様子」に対して、戦時中は満州にいた村長の知名は「自分だけが拍子で生き残ったことを、正直に話すひとはいません」と述べる。島民が拘るのは〈日常〉であり、一方でそれは〈生/死〉の境界が偶然性をもって存在したことを含み込んで生きねばならない環境の特殊性でもある。したがって〈真実〉にのみ接触しようとする田港は、島出身であっても「半沖縄人」としての〈ずれ〉を持つものとして他者化されるのである。

この〈日常〉が維持される背後に、「祖国復帰」の問題が配置される。田港と与那城、全秀の息子である村の助役全一との会話(四章)では、外資が導入されることで「将来何年かあとには、この神島の性格が一変するような構想というか期待をもっているわけです」と全一は語る。復帰をめぐる経済力の強化が示唆されるのである。

「いや。両方必要なんですよ、先生。というより、このような美しい島に、あのような酷い戦争があった、それを訴えることによって、島のいまの美しい姿がより強く印象づけられる、そして将来観光誘致の力にしようということです。現実ばなれしていますか……」
／最後のところで普天間全一は、照れて笑った。当人は、「あながち、誇張でもないのだ」という自信をもっているようである。その夢が

非現実的すぎるというのではないが、バラ色の観光施設の夢と戦争の傷痕とが結びついて発想されるということが、よく分りかねる。

生者に許された「現実の発展」という〈日常〉の維持のため、「戦争の悲劇」は利用すべきものと解される。村長や全一の世代が代表する島の若い指導部にとっては、発展、繁栄が選択されるべき重要項目である。ここに「祖国復帰」から引き出される本土との「一体化」の問題が浮上する。

大城は、「祖国復帰」に際してあらわれた「本土なみ」という言葉は、なにもかも本土へ本土へ、という戦後沖縄の願いのようなものを一言であらわしたものであった。日本の側でもその運動を素朴に迎える方向へ進み、日本と沖縄との一体化ということが言われた」(21)と認識している。このような自己を消滅させる方向での「一体化」は当然主体性の喪失を意味すると大城は考える。

そこで本章では、田港も勤務した国民学校長であった普天間全秀と、その妹でノロの浜川ヤエを中心に、戦争体験者の位相を明らかにし、大城の思想の重要な「主体性」について考察する。

田港は、久しぶりに普天間全秀に再会する。

「基地ができるとき、反対運動はあったのですか」／「いや、なかった。あっさりと出来ました」／「先生は、そのときは……」／誰かひとりぐらいいは、反対とはいわぬまでも、島をあげての風潮についていけないという者が、ひとりぐらいいてもよさそうなものだ、と思う。そして、そのひとりとは、あの戦争中に、島の国民学校長として一徹な国民教育の実践者であった普天間全秀であってもよいと思う……。

ここで田港は「一徹な国民教育の実践者であった普天間全秀」を想起している。ミシエル・フーコーは自発的に行動させる権力の構造を考察し、それを「ディシプリン」(規律)と規定した。不可視化された権力は、「錬成」|| 規律化によって身体と精神を支配する。それが潜在的であるため、戦時下に「錬成」された国民は「自発的」に「皇道ノ道」を歩むような権力構造を内規化していく。国民学校という教育現場で全秀が果たした役割は深く重いものである。戦時中、全秀は「村長と手分けして、精力的に島民の壕を訪ねて説得した。彼が戦後、何事によらず他人を説得することを断念したのは、その体験による。教育界を退き、基地建設を疑いながらも傍観するようになった」と記される。ここでは「集団自決」を「事故」として認識することで、同胞を死に追いやった出来事の偶発性が強調される。「説得」することで「集団自決」を招いた結果から距離を保つために、全秀の戦後の「説得」行動は回避されているのである。

全秀は、「田港君。はつきりしない、させたくない、ということも、立派な歴史の証言だとは思いませんか」と田港に問いかける。ここでの語りえない歴史のなかに「集団自決」も埋没していく。「はつきりしない、させたくない」ことが「歴史の証言」として承認されれば、個々の〈死〉という物語は集団的「記憶」の営みから消去されてしまう。全秀は複層的な〈被害/加害〉の構図において、島民としての被害者性と、指導者としての加害者性を持つ。しかしその加害者性は後悔の念のうちにとどまり、表にはあらわれないのであった。

「神島」における〈対〉の関係は、島の外部という視線をもって成立する。島外人は、〈日常〉性に依拠して繁栄を志す島の論理と対立する。一方、神島内部における〈対〉の関係を導く者として、浜川ヤエがいる。「拝所」は島の祝女殿内の家柄のヤエ以外の立ち入りが禁じられていた。しかしヤエは生き残るために家族を隠し、遂には兵隊までもが入り込む

結果を招く。ヤエにとっては「汚れたものを清めるためにあったはずの祈願や祭事が、汚れをよりつよく意識し、悔いを積みかさねる契機となる」。戦後を迎えると、ヤエは宮口軍曹に殺された夫の遺骨を、神のしるしの「勾玉」を頼りに一五年間探し続けることになる。

ところで、田港真行が神島を訪れたのは、「戦没者慰霊祭」に招待されたためであった。この「慰霊祭」は島の戦争で亡くなったすべての人々の慰霊を目的とした儀式であり、神島における〈沖繩戦〉戦没者を一様に扱いながら死者を「記憶」する作業となる。「慰霊祭」は死者との関係を安定させる儀式である。「慰霊祭」を通して死者を鎮めることで、生者側の〈日常〉が回復する契機となる。その意味では社会秩序の再構築に貢献するものであり、〈沖繩戦〉で亡くなった者を、共同体の「記憶」内に、安定した状態で留めることを可能とする。それは〈日常〉からの死者の離脱であり、〈日常〉という直線的时间における忘却が進み、痛ましい記憶は記念日においてのみ想起される。したがって生を中心にした安定した社会秩序の回復が意味づけられる。

浜川ヤエは、「勾玉」という神事の証と夫の遺骨探しを回帰的に回復することを理由に、「慰霊祭」への参加を拒否し続ける。同時にヤエは祝女殿内の神事を軸とした伝統的社会秩序の回復を希求するのである。ヤエは神事の象徴としての「勾玉」を求めて、「慰霊祭」を無視しながら、死者と伝統と向き合う。このヤエの行為は〈日常〉における死者への回帰・反復であり、本土からの客人を招いた「慰霊祭」|| 社会秩序構築とは相反する。「神さまを汚した」ことへの「責任」は伝統の回復をヤエに課し続け、そのためにこそ遺骨と「勾玉」の発見が必要となる。

だが、そこに伝統は本当に回復されることになるのだろうか。夫を殺したとされる宮口軍曹の娘朋子は、「償い」について、「死んだひとに完全に償いが出来るとは思いません。しかし、償いの気持をもっていれば、なにかをしないではおれないはず。それが人間の償いだ

と思います」という考えを持ち、ヤエの遺骨探しを手伝うも、不慮の事故によって絶命してしまう。朋子の死と交換してまで拘泥する「神」は、ヤエにとつて回復を意味するのだろうか。「激しい懐疑心から解放」されるどころか、「なお償えない答え」と直面し、「神」の島である神島の表層を浮遊するしかないように思える。

六、おわりに

大城立裕は、戦前に生まれ、戦時中は上海にある東亜同文書院大学で学んだ。戦後に帰郷し、沖縄を代表する小説家、思想家となる。大城の初期の作品群には沖縄を積極的に代表する姿勢とは異なる、私小説的なミニマムな世界が展開されていた（「老翁記」など）。一方、一九五〇年代に始まる米軍統治の強権力発動の場において、沖縄の政治性と文学との衝突を目の当たりにしていく（『琉大文学』との論争）。この時期に書かれたエッセイを手掛かりにすることで、大城が沖縄の自立性を問い、そのうえで、沖縄的なものを思考していった。その延長上に、「カクテル・パーティー」があった。本作では、一義的な被害／加害の関係を解体し、沖縄の現状への疑義を呈した。つまり、当事者性や加害性に目を向けることで、加害／被害の両義的な痛みを伴うことに向き合ったのであった。

また「神島」では、沖縄にある架空の離島における複層的な関係性をとらえ、戦争の痛みと、〈日常〉の回復という問題を対立させた。戦争の痛みは忘却しえないものであるが、島民（集団自決に連なる人々・当事者）は〈日常〉を回復して未来に生きなければならない。島民がいかなるポジションに位置するかを問うことで、複層化した生と死の意味を対立させたのであった。

沖縄を問うことは一義的な問題ではない。大城は、対の概念を用いな

がら、出来事（事件）に見られる多層性に目を向け、当事者性、痛みを共有することを厭わない。なぜならその地点からしか主体性は立ち上がらないからだ。この問題は、現在の沖縄へも連なる問いとなる。辺野古に基地がなぜ建設されねばならないのか、なぜ多くの米軍施設が沖縄に集中するのか。大城立裕の問いは、早急な答えを必要としない。問い続けること自体に意味があるように思える。

【注記】

- (1) 大城立裕「カクテル・パーティー」『新沖縄文学』一九六七・二
- (2) 大野隆之『沖縄文学論——大城立裕を読み直す』編集工房東洋企画、二〇一六・三
- (3) 池田和、嘉陽安男、船越義彰、矢野野暮談「沖縄は文学不毛の地か」『新沖縄文学』一九六六・四
- (4) 『私の沖縄教育論』（若夏社、一九八〇・四）を参照。戦後に高校の教員を務めたことのある大城は、ここで繰り返し「学校教育では、幻想の祖国と反米のみを教えて、実感としてもっているはずの郷土愛を教えなかった」（「正直になろう」）ことを批判する。
- (5) 大城立裕『現地からの報告——沖縄』（月刊ペン社、一九七〇・八）
- (6) 池田和は嘉陽安男との対談において、初期の大城作品は「必ずしも私小説だとは思わないけど」とする嘉陽に、「素材を歴史ものにとつてはいるけど、内容は私小説的で、その辺がスタートだ」という気がするんですがね」と述べている（「対談・『大城文学』の周辺」『青い海』一九七八・一）。
- (7) 花田俊典「疎開者たちの沖縄——大城立裕「望郷」の背景」『Comparatio』二〇〇一・三
- (8) 引用は沖縄県立図書館所蔵資料「OK/90/077」ならびに前掲（7）書を参考とした。

(9) 例えば、太田朝敷や伊波普猷の議論が参考になるが、ここでは伊波『古琉球』（沖繩公論社、一九一一・一二）における沖繩と日本の同祖論、新川明『異族と天皇の国家』（二月社、一九七三・一二）における差異としての民族問題を参考とされたい。

(10) 『文藝春秋』一九六七・九

(11) マイク・モラスキー／鈴木直子訳「無人地帯への道」(『占領の記憶／記憶の占領』青土社、二〇〇六・三)

(12) 岡本恵徳『沖繩文学の憧憬』、仲程昌徳『アメリカのある風景』、鹿野政直『戦後沖繩の思想像』、大野隆之『沖繩文学論』、武山梅乗『不穏でユーモラスなアイコンたち』、村上陽子『出来事の残響』などに所収された「カクテル・パーティー」論が参考になる。

(13) 前掲(11)書

(14) 大城立裕『現地からの報告——沖繩』(月刊ペン社、一九七〇・八)

(15) 被害者の位相にあった沖繩県民が、一九七〇年一二月に起こしたのが「コザ騒動」であった。糸満で発生した「主婦轢死事故」への無罪判決に端を発した住民の怒りは各地で抗議集会の形としてあらわれた。さらに県民が撤去要求を求めた毒ガス移送計画の問題も重なり、コザ市内で起きた交通事故への処理に対して、住民が車両を焼き払う行動に出たのであった。宮城悦二郎は米軍が「暴動」と呼び、地元新聞が「騒動」としたこと統治する／される側の関係性を見出し、事件の際の住民の、米軍関係者だけを対象とした「理性的」行動を挙げ「公共の平穏」を著しく害したとはいえないことから「コザ騒動」と呼称する(「コザ騒動」『新沖繩文学』一九八一・一二)。

(16) 大城立裕「戦争が契機に」(『新沖繩文学』一九六六・九)

(17) 安次嶺栄一、伊礼孝、大城立裕が参加した座談会「沖繩は文学不毛の地ではない」(『琉球新報』一九六七・七・二二)では、「ユニバーサルな問題が『カクテルパーティー』では、沖繩の今日的状況とふれながらでている」(安次嶺)、「沖繩という閉鎖性が感じられない」(伊礼)と述べられている。「沖繩なるもの」が潜在化する問題が、ここでは「ユニバーサル」なものへと接続することで、世界文学的な構想の一端となるること、その期待が表明されている。

(18) 本論では「単行本」版の「神島」を扱う。

(19) 大城立裕「複眼」(『私の沖繩教育論』若夏社、一九八〇・四)

(20) 仲程昌徳『小説の中の沖繩——本土誌で描かれた「沖繩」をめぐる物語』(沖繩タイムス社、二〇〇九・三)

(21) 大城立裕「同化と異化」(『光源を求めて』沖繩タイムス社、一九七・七)